研究課題別事後評価結果

１．研究課題名：　自然言語処理による心の病の理解：未病で精神疾患を防ぐ

２．研究代表者名及び主たる研究参加者名（研究機関名・職名は研究参加期間終了時点）

研究代表者

岸本　泰士郎（慶應義塾大学医学部　専任講師）

主たる共同研究者

狩野　芳伸（静岡大学学術院情報学領域　准教授）

３．事後評価結果

〇評点：

B　成果がやや不足している

〇総合評価コメント：

精神疾患のバイオマーカー開発を目指し、精神科医が最も重視する患者の言葉に表れる疾患の特徴量の抽出や定量化を、精神医学と自然言語処理の協働チームによって研究に取り組んだ。

本研究では、正確な診断結果がついたうつ病・双極性障害、統合失調症、不安症、認知症患者のデータを収集し、220 時間を超える心理士との対話の音声データ、512 万字の患者による SNS のテキストデータが収集されている。音声データには発話分の長さ、語彙、構文の複雑さなど分析に必要なアノテーションの作成も行われており、確定診断つきということも考慮すると世界的にも類を見ない大変貴重なデータであると言える。一方で臨床データの収集には倫理申請、パイロット研究、本試験と進めるため時間がかかり、残念ながら自動診断を目指した解析については初歩的なものにとどまってしまっている。

精神疾患の予防、診断、治療は大きな社会問題となっており、「心の病の早期発見・定量化とそれを基盤とした社会サービスの創出」という目標達成に対する期待は大きい。現時点でうつ病診断において一定以上の精度が報告されており今後の進展に期待できる。スモールフェーズの提案内容に閉じたデータ整備と解析手法の検討だけでなく、広く研究グループを構成し、他データとの統合を行うなど、あらゆる面から社会問題解決のための研究に取り組んで欲しい。